

# 太宰治「魚服記」論

—『山の人生』との比較を中心として—

青木京子

## 〔抄録〕

「魚服記」(昭和8・3「海豹」)は、山内祥史氏の「太宰治と古典(日本)文学」(『国文学解釈と鑑賞』昭和60・11、至文堂)等によって、柳田国男の『山の人生』(郷土研究社、大正15・11)が典拠であると指摘され、示唆的である。が、山内氏はそれらの指摘に抑制し、あえて作品世界にまで言及を避けている。

「魚服記」には、「鬼子」を中心とするスワの造形、スワの年齢、若い女の〈神隠し〉の事件、「花嫁姿」の造形、滝への投身、〈蛇体〉への変身、「山」の〈禁忌〉等、山内氏の指摘以外の『山

の人生』の他の箇所も、従来思われていた以上に深く広く踏まえられている。

本稿では、「魚服記」と『山の人生』を詳細に比較する事により、「魚服記」の作品世界を明確にしていきたいと思う。

キーワード…〈神隠し〉、〈不思議〉、〈風吹〉、〈近親相姦〉、

山の〈禁忌〉、女性の〈悲劇〉

## 一、はじめに

昭和八年三月、「海豹」に発表された太宰の処女作の一つ「魚服記」は、柳田国男の『山の人生』(郷土研究社、大正15・11)が典拠であると指摘されている。

久保喬氏の『太宰治の青春像』(六興出版、一九八三・五)は、太

宰治から柳田国男の『山の人生』を見せられ、その巻頭に置かれた「一 山に埋もれたる人生ある事」を読むように求められたとしている。

山内祥史氏は「太宰治と古典(日本)文学」(『国文学解釈と鑑賞』昭和60・11、至文堂)の中で、「魚服記」「二」には、『山の人生』「一」「二九」の義経に関する伝説、古伝、挿話が、「二一」「二二」に

は「谷にふみはづして落ち入りけるが樹の根にて足を痛め」た者の話、

「二三」には「津軽での話」として「田畑も多からねば、炭を焼き巻を樵りて、活計の一助となす」話、「二六」には「山々には、今でも随分と遠国から、竈に入つて永く稼いでゐる者が多い」話、「四」には「八郎といふ類の人が山中に入り、奇魚を食つて身を蛇体に変じたといふ話」を、また「魚服記」「三」には、「一四」「風の騒がしい秋の日」に起こる出来事、「二五」、「二七」、「二八」には、「山人の足音や笑い声の類を聴いた者の話、天狗倒し、小豆磨の話」、「二二」には「山で働く者の小屋の入口は、大抵は垂簾を下けたばかりであるが、山女夜深く来つてその簾をかかげ内を覗いたといふ話」、「炭焼く者の小屋へ、七尺余りの大山伏がやつて来る」話、「五」、「三三」、「二四」にも、「背の高い男や山人や山男が山小屋や仮小屋や炭焼小屋を訪れる話」が記され、冒頭からだけではなく、「魚服記」の、「山中での生活」や、スワの〈伝説の世界への憧憬〉〈昔語りへの郷愁〉などに関する記述は殆ど『山の人生』から材を得ていると指摘している。

また、杉田悦子氏は「『魚服記』と『山の人生』——太宰治における柳田国男の受容——」（『群馬県立女子大学国文学研究』一六号 平成8・3）において、山内祥史氏の検証から、「作中人物の父親に託された太宰の当時の心境」を考察し、父親に託された太宰の心境を中心に論じ、木村小夜氏は「魚服記」解題（花田俊典『太宰治のレクチュール』双文社出版、二〇〇一・三）の中で、『山の人生』の巻頭以外の箇所にも「魚服記」との関連を想起させる記述がいくつか見えるとし、それらを列記（「二」「四」「二二」「二三」「二五」「二八」）して

いる。

そのような中で、山内祥史氏の論考は特に示唆的である。が、山内氏はそれらの指摘に抑制し、あえて作品世界にまで言及を避けている。

『山の人生』は、山内氏が指摘している以外の箇所も、深く広く踏まえられているのではなからうか。特に、「魚服記」第二節の「鬼子」を中心とするスワの造形や、〈神隠し〉に纏わる女性の失踪事件、「魚服記」第一節の学生の転落死を中心とする山の〈禁忌〉は、「魚服記」の重要な側面であり、『山の人生』の記述を深く踏まえたものだと思うわれる。

本稿では、「魚服記」に登場するスワの造形や〈神隠し〉に纏わる失踪事件、山の〈禁忌〉、〈異界〉の生活等に焦点を当て、山内氏の指摘以外にも、『山の人生』から多くの材を得ていることを提示したい。さらに、「魚服記」と『山の人生』を詳細に比較することにより、「魚服記」の作品世界を明確にしていきたい。

「魚服記」の主人公でもあるスワは太宰前期に属す女性であるが、どのような女性像として位置づけられるのかを明示できればと考えている。（底本は第一〇次筑摩書房版『太宰治全集』全一二巻・別巻（一九九八年五月／一九九二年四月）を使用）。

## 二、スワの造形

### 1、スワという呼称

「魚服記」第二節の炭焼小屋の一人娘の造形は、『山の人生』の巻

頭を踏まえたものだと思われる。

・茶店の女の子はその小屋の娘であつて、スワといふ名前である。父親とふたりで年中そこへ寝起してゐるのだつた。(略)父親はすぐ炭小屋へ帰つてゆくが、スワは一人ゐのこつて店番するのだつた。(二)

・女房はとくに死んで、あとには十三になる男の子が一人あつた。(略)同じ歳くらゐの小娘を貰つて来て、山の炭焼小屋で一緒に育て、居た、其子たちの名前はもう私も忘れてしまつた。「二」「魚服記」は(一)、『山の人生』は「」で示す。傍線は筆者に依る。以下同じ」

ここでは、どちらも炭焼小屋の娘であり、『山の人生』の他の箇所には、その記述は見られないので、「魚服記」第二節はこの巻頭の一文を踏まえたものだと思われる。

しかし、双方の決定的な相違は、『山の人生』の少女には、「名前はもう私も忘れてしまつた。」と呼称は明記されていないのに、「魚服記」には「スワ」という呼称が付与されていることである。「スワ」という名前は、拙論『魚服記』の素材——『甲賀三郎』をめぐって——<sup>(1)</sup>で、筆者が指摘したように、「諏訪明神」の「諏訪」の地名から由来している。

「魚服記」に「スワ」という呼称が与えられたのは、深山に住む大切な少女を主人公としてクローズアップしようとしたからではなからうか。

## 2、「鬼子」

少女期のスワは次のように叙述されている。

スワは父親のあとからはだしではたばたついて行つた。父親はすぐ炭小屋へ帰つてゆくが、スワは一人ゐのこつて店番するのだつた。遊山の人影がちらとでも見えると、やすんで行きせえ、と大声で呼びかけるのだ。父親がさう言へと申しつけたからである。しかし、スワのそんな美しい声も滝の大きな音に消されて、たいていは、客を振りかへさすことさへ出来なかつたのである。

黄昏時になると父親は炭小屋から、からだ中を真黒にしてスワを迎へに來た。(略)スワを茶店にひとり置いて心配はなかつた。山に生れた鬼子であるから、岩根を踏みはづしたり滝壺へ吸ひこまれたりする氣づかひがないのだつた。天氣が良いとスワは裸身になつて滝壺のすぐ近くまで泳いで行つた。泳ぎながらも客らしい人を見つけると、あかちやけた短い髪を元氣よくかきあげてから、やすんで行きせえ、と叫んだ。(二)

スワは「裸身」で「あかちやけた短い髪」をし、「鬼子」と叙述されている。これらスワの造形は、『山の人生』・「五」、「一七」、「一八」、「二二」、「二三」に見出せる。

・作州那岐山の麓、日本原の廣戸の瀧を中心として、處々に山姫が出没すると云ふ評判が高かつた。裸にして腰のまはりだけに檻襖を引纏ひ、髪は赤く、眼は青くして光つて居た。「五」

・鬼子の最も恐ろしい例としては、此家の女房三度まで異物を分婉し、四番目に産んだのがこの鬼子であつた。色赤きこと朱の如く、

両眼の他に額に尚一つの目あり、口廣く耳に及び、上に齒二つ下に齒二つ生えて居た。父嫡子を喚びて横槌を持つて来いといふと、鬼子之を聞いて父が手に咬みつくのを、其槌を以て頻りに打つて殺してしまつた。「二七」

・山中に入りたる時頻りに睡眠を催し、異人を夢見ることあれば必ず娘む。産は常の如くにして、たゞ終りて後神氣快からずと雖死ぬやうなことは決して無い。生れた児は必ず齒を生じ且つ善く走る。仍て鬼子とは謂ふ也とある。「一八」

・猪を追ふ女の白い姿と謂ふは、或は裸形のことを意味するのでは無かつたか。(略) それがもし実験者の言に基くものならば、泣きながらとは多分奇声を發して居たことを謂ふのだらう。遠野物語に書留められた山中深夜の女なども、待てちやアと大きな聲で叫んだと謂つて居る。「二二」

・たけ六尺ほどで髪 of 長さは踵を隠すばかり……。「二二」

『山の人生』・「五」の、廣戸の瀧に出没する山姫は「裸」であり、髪 of 毛は「赤」い。この「裸」や「赤」い髪は、「二二」にも見られるので、スワの造形はこれらを踏まえたものだと思われる。また、「鬼子」という記述は、『山の人生』・「二七」、「一八」に見られ、特に「二七」には、「鬼子の最も恐ろしい例」として、「色赤きこと朱の如く、両眼の他に額に尚一つの目あり、口廣く耳に及び、上に齒二つ下に齒二つ生え、父の手を「咬む」という凶暴な容貌と動作が表出されている。

しかし、スワの少女期の髪は、『山の人生』・「二二」の「山女」

のように、「踵を隠す」ほど長くはなく、「短い」。スワは、「父親のあと」を「ばたばた」とついて行き、遊山の人たちに「やすんで行きせえ」と「大声」をかける。が、その大声も『山の人生』・「二二」の「山姥」のような「奇声」ではなく、「美しい」とされる。この「ばたばた」という擬声語や「短い」髪からは、〈無邪氣〉な様子が窺える。また、スワが大声を出すのは、父親に申しつけられたからであり、そこには〈従順〉さが窺える。

このように、少女期のスワは「鬼子」と造形されるが、むしろ、〈無邪氣〉で〈従順〉な少女として描かれている。

### 3、スワの年齢

「魚服記」のスワの年齢は、第一・二節に、次のように設定されている。

・しかし、淵のそばの茶店にゐる十五になる女の子が一番はつきりとそれを見た。(二)

・スワが十三の時、父親は滝壺のわきに丸太とよしずで小さい茶店をこしらへた。(二)

スワは、「十三」から「十五」歳とされ、少女から大人へ変化する微妙な年齢といえる。

それがこのごろになつて、すこし思案ぶかくなつたのである。

滝の形はけつして同じでないといふことを見つけた。(略) 果ては、滝は水でない、雲なのだ、といふことも知つた。(略)

スワはその日もぼんやり滝壺のかたはらに佇んでゐた。(二)

前述のように、少女期のスワは〈無邪氣〉で〈従順〉であるが、「十五」歳になると「思案ぶかく」なり、「滝の形はけつして同じでない」と思考をめぐらせ、「ぼんやり」佇み始める。内なる意識に目覚め、亡くなった「都」の学生を追慕するかのようである。

「お父」

スワは父親のうしろから声をかけた。

「おめえ、なにしに生きてるば」

父親は大きい肩をぎくつとすばめた。スワのきびしい顔をしげしげ見てから呟いた。

「判らねぢや」

スワは手にしてゐたすすきの葉を噛みさきながら言つた。

「くたばつた方あ、いいんだに」

父親は平手をあげた。ぶちのめさうと思つたのである。しかし、もちもちと手をおろした。スワの氣が立つて来たのをとうから見抜いてゐたが、それもスワがそろそろ一人前のをんなになつたからだな、と考へてそのときは堪忍してやつたのだつた。(二)

スワは父親の問いかけに返事もなく、「なにしに生きてるば」「くたばつた方あ、いいんだに」と辛辣な言葉を投げかける。父親はスワの生意氣な言動に、ぶちのめさうと思うが、スワが「一人前のをんな」へと變化したのを察知し、「堪忍」してやるのである。この、スワの「氣が立つて来た」という表現は、『山の人生』・「一四」の次のような記述を踏まえているのではなからうか。

或農家の娘物に隠されて永く求むれども見えず、今は死んだ者と

あきらめて居ると、ふと或日田の掛稲の蔭に、此の女の来て立つて居るのを見た人があつた。其時はかしもう餘程氣が荒くなつて居て、普通の少女の様では無かつた。さうして又忽ち走り去つて、終に再び還つて来なかつたと謂つて居る。

これは、『神隠し』に遭遇した娘が、再び田の掛稲の蔭に現れた時の氣性の荒さを描いたものであるが、双方には「氣」が「立つて」、「荒くなつて」とほぼ同一のニュアンスで描かれているので、『山の人生』・「一四」を踏まえたものだと思われる。スワの急激な氣性の變化は、少女から「をんな」へ變化したこと、即ち、初潮を迎えたことに起因している。また、スワがススキを噛み砕く行為は二度も繰り返され、スワの心理の激変を象徴的に描いている。

松岡利夫「婚姻の儀礼と習俗」(『津輕の民俗』昭和45・3、吉川弘文館)には、女子の「十五」歳という年齢について、次のような指摘が見られる。

津輕地方でも、十六、七歳で嫁に行くのが普通であつたのは、さまで遠い昔ではなかつたという。(略)十二支をひと廻りした年齢―つまり数え年の十三歳で娘の子は女になるという考え方(平館村・深浦町)や、十五歳になると部落の若者たちからトシナを張られて、一人前とみられたというのであれば、無理からぬことであつたかと思われる。

津輕の婚姻風習で考えれば、娘は「十三」歳で「女」になり、性的成熟期を意味する。さらに、「十五」歳になると「一人前」と見なされ、結婚適齢期といえる。スワは初潮を迎え、「をんな」になつて、

結婚の対象とされたのである。

次に、『山の人生』・「六」には、美濃・夜叉ヶ池の夜叉御前が〈水の神〉に嫁ぐ話が描かれているので、「魚服記」第三節と比較してみる。

・三輪式神話の残影と見て居る龍婚蛇婚の国々の話の中にも、存外に起源の近世なるものが無いと言はれぬ。例へば上州の榛名湖に於ては、美しい奥方は強いて供の者を帰して、しづくと水の底に入つて往つたと伝へ、美濃の夜叉ヶ池の夜叉御前は、父母の泣いて留めるのも聴かず、あたらず十六の花嫁姿で、独り深山の水の神にとついでと謂つて居る。「六」

・めづらしくけふは髪をゆつてみたのである。ぐるぐる巻いた髪の毛へ、父親の土産の浪模様がついたたけながをむすんだ。（三）

スワは髪を結い上げ、「浪模様」の「たけなが」<sup>(2)</sup>を結び、「花嫁姿」を髣髴とさせる。これに対応するのは、『山の人生』・「六」の「花嫁姿」である。「夜叉ヶ池」の「夜叉御前」は、両親が留めるのも聴かずに「水の底に入り、〈神の嫁〉になる。「魚服記」のスワも、父親に犯された後は、「都」の学生に追隨するように、「滝」に投身するが、これは、〈水の神〉に嫁ぐような枠組みを踏まえたものと思われる。

### 三、〈神隠し〉

#### 1、〈危険〉な時間

女・子供が不意に行方不明になり、容易に見つからない場合を〈神隠し〉<sup>(3)</sup>にあつたというが、「魚服記」第二節から第三節にかけては、〈神隠し〉の予兆として、〈危険〉な時間が設定されている。

・黄昏時になると父親は炭小屋から、からだ中を真黒にしてスワを迎へて来た。

・日が暮れかけると山は風の音ばかりだつた。（以上（二））

・ほんが過ぎて茶店をた、んでからスワのいちばんいやな季節がはじまるのである。

・日が暮れかけて来たのでひとりで夕食を食つた。（以上（三））

〈黄昏〉<sup>(4)</sup>は、柳田国男の「妖怪談義」中の「かはたれ時」によると、「雀色時」ともいい、人を識別できない〈危険な時〉を示す。〈黄昏〉時になると、父親はスワを迎へて来るが、この〈黄昏〉に相当する時間には、『山の人生』・「二四」に、次のように叙述されている。

此市に住んで醤油の行商をして居た男、留守の家には女房が一人で、或日の火ともし頃に表の戸をあけて、此女が外に出て立つて居る。あゝ悪い時刻に出て居るなど、近所の人たちは思つたさうだが、果たして其晩から居なくなつた。（略）やはり時刻はもう暮近くに、何気無しに外を見たところが、宿から僅か隔つた山の根笹の中に、腰より上を出して立つて居た。

ここでは、「火ともし頃」、「悪い時刻」としているが、「醤油の行商

をして居た男」が「留守」にしている時、「女が外に出て立つて居る」  
〈危険〉な時間帯に「女」は忽然と居なくなるのである。この「魚服  
記」の「日が暮れかける」という記述は、『山の人生』・「一四」の  
「時刻はもう暮近く」を踏まえている。

また、「ぼんが過ぎる」と「いちばんいやな季節」とされるが、『山  
の人生』・「一四」には「遠野物語」の〈神隠し〉の話、即ち、寒戸  
の民家の若い娘の失踪話が描かれ、「祭」、「法事」等、山岳信仰と関  
わりのある行事が記述されている。伊豆の〈神隠し〉の話にも、「三  
十三回忌」が記述され、「霊」に関連した行事である。「魚服記」には、  
女・子どもが〈神隠し〉に遭つて失踪するという背景に相応しい時間  
を設定しているのである。

## 2、〈不思議〉な現象

「魚服記」第二節から第三節にかけて、スワが滝に投身して失踪す  
る事件の前兆として、山の〈不思議〉とされる〈風吹〉と〈怪異〉現  
象が描かれている。

- ・「秋土用すぎで山さ来る奴もねえべ」
- ・日が暮れかけると山は風の音ばかりだった。樫や樅の枯葉が折々  
みぞれのやうに二人のからだへ降りかゝつた。(以上(二二))
- ・風のために朝から山があれで小屋のかけむしろがにぶくゆすられ  
てゐた日であつた。
- ・木々のさわぐ音にまじつてけだものの叫び声が幾度もきこえた。
- ・夜になると風がやんでたゞしんと寒くなつた。こんな妙に静

かな晩には山できつと不思議が起るのである。天狗の太木を伐り  
倒す音がめりめりと聞えたり、小屋の口のあたりで、誰かのあづ  
きをとぐ気配がさくさくと耳についたり、遠いところから山人の  
笑ひ声がつきり響いて来たりするのであつた。(以上(二三))

「秋土用」が過ぎ、「日が暮れかける」と山は「風の音」ばかりに  
なり、「ぼん」が過ぎると、「風」は「朝」から「吹き」荒れる。この  
〈風吹〉の記述は、『山の人生』・「一四」に見られる。

- ・女の神隠しには殊に不思議が多かつた。
- ・其日はひどい風の吹く日であつたといふことで、遠野一郷の人々  
は、今でも風の騒がしい秋の日になると、けふは寒戸の婆が還つ  
て来さうな日だと謂つたとある。

・以前は大風の吹く日には、けふは傳三郎どうの娘が来るべと、  
(略)風吹といふことが一つの様式を備へて居る上に、家に一族  
の集まつて居たといふのは、祭か法事の場合であつたらうが、そ  
れへ来合せたとあるからには、既に幾分の霊の力を認めて居たの  
である。

双方には「秋」、強い「風」、「騒がしい」音等が共通しており、「魚  
服記」の〈怪異〉現象は、『山の人生』・「一四」の記述を踏まえて  
いる。

また、「めりめり」という「天狗の太木を伐り倒す音」は、『山の人  
生』・「二五」、「二七」、「二八」に叙述されている。

- ・木を伐出す必要があつて、十月七日に山入して御幣餅を拵へたの  
はよいが、山の神に上げるのを忘れて、自分たちで皆食つてしま

つた。さうすると早速山が荒れ出して、其の夜は天狗倒しと謂つて、大木を伐倒す音が盛んにした。「二五」

・他の地方で天狗笑ひ又天狗倒しともいふもので、山中茂林の中に異常の物音を發し、或は又意味不明なる人の聲がすることもあつた。「二七」

・足音や笑ひ聲の類は、偶然に之を聴いた者がおち恐れたといふだけで、固より其様な計画のあつたことを、立證することは容易で無い。殊に最も有名な天狗倒しの音響に至つては(略)深夜人定まつてから前の山などで、大きな岩を突落とす地響がしたり、又はカキンカキンと斧の音が續いて、やがてワリワリく／＼バサアンと、さも大木を伐り倒すやうな音がする。「二八」

『山の人生』・「二五」の「山が荒れ」、「天狗倒し」、「大木を伐倒す音」という記述は、「魚服記」第三節の「山があれ」や「天狗の大木を伐り倒す音」と殆ど同じである。「天狗」の怪音は『山の人生』・「二七」にも見られ、『山の人生』・「二八」には「天狗倒しの音響」として、「魚服記」第三節の「めりめり」に近い「ワリワリ」が用いられ、これ等の記述を踏まえたものだと思われる。

また、「さくさく」という「あづきをとぐ気配」も、『山の人生』・「二八」に見られる。

炭竈に宿する者、時としては鬼魅の恠を聴くことあり。其恠を伐木坊又は小豆磨と謂ふ。(略)小豆磨は炭小屋に近づきて、中夜に小豆を磨する音を為す。其聲サク／＼と云ふ。

ここでは、「小豆」と「あづき」、「サク／＼」と「さくさく」の漢

字や平仮名、片仮名表記に違いは見られるが、ほぼ同一の語彙であり、『山の人生』・「二八」を踏まえたものだと思われる。また、「山人」の「笑ひ声」も、『山の人生』・「二八」に、「山人」や「笑ひ聲」の記述が見られ、これを踏まえていると思われる。

「天狗」は、柳田国男の「山人外伝資料」<sup>(5)</sup>に、「ゲヒン・山の神・大人・山人」と呼ばれ、「山に住んだ実在の特殊な人間を、里の人が誤認した」としている。「山人」も、柳田の『山人考』<sup>(6)</sup>に、「異種族ではなく、山地に居住し、山地を利用して生活をたててきている人びと」と言われ、「小豆とき」も、柳田の「妖怪名彙」<sup>(7)</sup>に、「水のはとりで小豆を磨くやうな音」の「化け物」とされる。これら「天狗」や「小豆とき」の怪音、「山人」の笑い声は、柳田の指摘により、「山男」の総称だと理解できるが、「山人」の訪問は大暴風の到来に結びつけられ、山中に棲む異風異俗の人々に対して、忌避するものとして描かれたのである。

### 3、〈近親相姦〉

スワと父親の〈近親相姦〉は、第三節に象徴的に描かれている。

めづらしくけふは髪をゆつてみたのである。ぐるぐる巻いた髪の毛根へ、父親の土産の浪模様<sup>(8)</sup>がついたたけながをむすんだ。それから焚火をうんと燃やして父親の帰のを待った。(略)

父親を待ちわびたスワは、わらぶとん着て炬ばたへ寝てしまつた。うとうと眠つてゐると、ときどきそつと入口のむしろをあけて覗き見るものがあるのだ。山人が覗いてゐるのだ、と思つて、



じつと眠つたふりをしてゐた。

白いもののちらちら入口の土間へ舞ひこんで来るのが燃えのこの焚火のあかりでおぼろに見えた。初雪だ！と夢心地ながらうきうきした。

疼痛。からだがしびれるほど重かつた。ついであのくさい呼吸を聞いた。

「阿呆。」

スワは短く叫んだ。

ものもわからず外へはしつて出た。

吹雪！それがどつと顔をぶつた。思はずめためた座つて了つた。みるみる髪も着物もまつしろになつた。

「一人前のをんな」になつたスワは、髪を結いあげ、「たけなが」を結び、「焚火」をうんと燃やして父親の帰りを待つ。この記述は「花嫁姿」を髣髴とさせると先に述べた。「髪上げ」は「娘になつたしるし」とされる。スワは「うとうと眠」り、白いものが「おぼろ」に見える、「夢心地」になつて幻覚の中にいる。「疼痛。からだがしびれるほど重かつた。ついであのくさい呼吸を聞いた。」の一文、特に「あのくさい呼吸」の「あの」の記述から、スワは「山人」ではなく、父親に犯されたことがわかる。〈近親相姦〉は「甲賀三郎窟物語」の不義密通を素材にしたと思われるが、スワは「阿呆」という叫び声の後、「めためた」と「座」り込む。「ものもわからなく」というのは、父親の行為が何を意味するのかさえもわからない状態だと思われる。スワ

は、幻夢の中では「白いもの」が「ちらちら」するが、犯された後では「吹雪！それがどつと顔をぶつた。」となる。あまりにもの衝撃で、スワは打ちのめされ、萎えてしまったのである。

このスワの状況は、『山の人生』・「六」の〈神の嫁〉になるシーンに近似している。

・羽後の田代獄に駆け込んだと云ふ北秋田の村の娘は、其前から口癖のやうに、山の神様の處へお嫁入りするのだと、謂つて居たさうである。（略）何か今尚不明なる原因から、斯ういふ錯覚を起して、欣然として自ら進んで、斯んな生活に入つた者が多かつたらしいのである。

・上州の榛名湖に於ては、美しい奥方は強ひて供の者を帰して、しづくと水の底に入つて往つたと伝へ、美濃の夜叉ヶ池の夜叉御前は、父母の泣いて留めるのも聴かず、あたふ十六の花嫁姿で、獨り深山の水の神にとついでと謂つて居る。「六」

村の娘は、「欣然として自ら進ん」で「田代獄に駆け込んだ」とし、「夜叉ヶ池の夜叉御前」は、「十六の花嫁姿」で、「深山の水の神にとついで」とされる。これは、スワが「花嫁姿」で父親に犯された後、「ものもわからず外」へ走り出て、「むしむし」、「ずんずん」歩き、滝へ投身する状況に重なる。この「むしむし」、「ずんずん」という擬態語からは、スワの意志の強さが感じられる。スワが向かった先は、「学生」がいると信じた「滝」だったのである。ただ、『山の人生』・「六」との相違点は、スワが「山人」ならぬ「父親」に犯され、「錯覚」ではなかつたということである。『山の人生』・「六」には、龍や蛇

が女性と結婚するという「龍蛇の婿入」の話が描かれ、「山と人界との縁組は稀有」とされる。が、スワが求めたのは、「蛇」ではなく、「都」の学生だったのである。

このように、スワが滝へ投身する構図は『山の人生』・「六」や「二四」のように、スワが〈神の嫁〉となり、〈神隠し〉に遭遇して失踪する状況に近似している。

#### 4、〈蛇体〉変身

第四節では、スワは「大蛇」に変身したと錯覚する。

大蛇！

大蛇になつてしまつたのだと思つた。うれしいな、もう小屋へ帰れないのだ、とひとりごとを言つて口ひげを大きくうごかした。小さな鮎であつたのである。たゞ口をぱくぱくとやつて鼻先の疣をうごめかしたゞけのことであつたのに。

鮎は滝壺の近くの淵をあちこちと泳ぎまはつた。胸鰭をびらびらさせて水面へ浮んで来たかと思ふと、つと尾鰭をつよく振つて底深くもぐりこんだ。（略）

それから鮎はじつとうごかなくなつた。時折、胸鰭をこまかくそよがせるだけである。なにか考へてゐるらしかつた。しばらくさうしてゐた。

やがてからだをくねらせながらまつすぐに滝壺へむかつて行つた。たちまち、くるくると木の葉のやうに吸ひこまれた。

水中にゐることを意識したスワは、先に学生が沈んだ時の「とどろ

き」を幽かに感じる。スワは、学生が滝の底に沈んだままであると思ひ、飛び込んだのである。閉塞された山から解放されたスワは、「スツキリ、さつぱり」し、「大蛇」になつたと錯覚する。滝の底は「大蛇」のいるところだと思つたのである。しかし、スワは「大蛇」にならず、小さな「鮎」になつたと夢幻のうちに感じている。「鮎」になつて真つ直ぐ「滝壺」に向かつていくと、たちまち、「木の葉のやうに吸ひ込まれ」てしまう。スワは「滝」ではなく、「滝壺」という〈危険〉な場所へ踏み入れたので、溺死したのである。その「死」は、木山捷平宛て書簡の「無残に死体が打ち寄せられた。」という文面<sup>10</sup>からも明らかである。

スワは〈山の神〉に嫁いで「大蛇」になつて水底に棲息するのではなく、〈山間〉に住む娘だったので、溺死したのである。

このように、「魚服記」は、〈山間〉に住む人々の運命の苛酷さと〈悲劇〉を描いている。

#### 四、山の〈禁忌〉

「魚服記」には、「山の神が支配する」という山岳信仰<sup>11</sup>と関わつた山の〈禁忌〉が多く描かれている。『山の人生』・「二三」には、「物忌み」の風習があつたとし、また、『山の人生』・「一九」には「物忌み」の日として「血の穢れ」が記述されている。これは、第二節のスワの通経時の忌み・「赤不浄」に相当し、誰にでも知られている山の〈禁忌〉である。が、「魚服記」第一節の「学生の死」に相当する

のは、「山の人生」・「二八」の記述である。

深山の奥に僅少の平和を楽しむ者が、いや狩人だの岩魚釣りだの、材木屋だの鉦山師だの、又用も無い山登りだのと、毎々来て邪魔をすることは鬱陶しいには相違ない。(略)そこに単独の約束が起り法則が生じて、後漸く宗教の形になつて行くことは、何れの民族でも変りはなかつた。(略)

深山の中でも特に不思議の多い部分を、我々は魔所又は靈地と名づけて敢て侵さなかつた。それが自然に現住土人に取つての一種のレザージュとなつたことは、原因とも結果とも解せられる。所謂入らず山に強ひて入つた者の、主観的な制裁は多様であつた。(略)何とも知れぬ原因で、躓いたり落ちたりして傷き又は死んだ。永遠に隠されてしまつて、親兄弟を欺かしめることもある。凡そ尋常邑里の生存に於て、予知すべからざる危難は悉く、自ら責め深く慎むべき理由として之を認めたのが山民の信仰であつた。

山の〈禁忌〉は、深山の奥に住む僅かな人々が、狩人や岩魚釣り、材木屋、鉦山師、山登り等で平和な山に入り、邪魔をされるので、その為に約束事を決め、それが宗教の形となり、法則となつたものである。深山の中でも特に〈不思議〉の多い部分を、「魔所」又は「靈地」とし、「入らず山」に強いて入つた者は「制裁」を受け、「何とも知れぬ原因」で、「躓いたり落ちたりして傷き又は死んだ」といわれている。

「植物採集」に來た学生の転落死は、「魚服記」・第一節では次の

ように叙述されている。

植物の採集をしにこの滝へ來た色の白い都の学生である。このあたりには珍らしい羊齒類が多くて、さうした採集家がしばしば訪れるのだつた。(略)

学生はこの絶壁によちのぼつた。(略)初秋の日ざしはまだ絶壁の頂上に明るく残つてゐた。学生が、絶望のなかばに到達したとき、足だまりにしてゐた頭ほどの石ころがもろくも崩れた。崖から剥ぎ取られたやうにすつと落ちた。途中で絶壁の老樹の枝にひつかかつた。枝が折れた。すさまじい音をたてて淵へた、きこまれた。(略)

いちど、滝壺ふかく沈められて、それから、すらつと上半身が水面から躍りあがつた。眼をつぶつて口を小さくあけてゐた。青色のシャツのところどころが破れて、採集かばんはまだ肩にかかつてゐた。

それきりまたぐつと水底へ引きずりこまれたのである。

学生は夏に羊齒類の茂つた「絶壁」に足を滑らせて淵に転落する。この学生の造形は、『山の人生』・「二二」に近似した表現が見られる。

対馬某といふ物産学者、葉草を採りに比叡山の奥に入つて、偶々谷を隔てて下の方に、人の小児の岩から飛降りてはまた攀ぢ登つて遊んで居るのを見た。

「羊齒類」の「植物」の「採集」に來た「学生」と、「葉草」を

「採り」に来る「物産学者」の僅かな語彙の違いはあるが、どちらも植物採集で入山しており、「絶壁」や「岩」に「よちのぼつた」や「攀ち登つて」等、類似語が見られる。従って、学生の造形は「山の人生」・「二二」を踏まえたものだと思われる。

しかし、学生が犯したという〈禁忌〉は、前述の『山の人生』・「二八」を踏まえているのではなからうか。学生は「絶壁」によじ登り、「絶望のなかばに到達」した時、「滝壺」に「石ころ」が「崩」れて、水を汚してしまう。「滝壺」は「絶壁」の下にあり、学生は淵の水を汚すという〈禁忌〉を犯している。それだけでなく、植物採集のために入山すること自体が〈禁忌〉なのである。

学生が、足を踏みはずした絶壁に相当する箇所は、『山の人生』・「二七」に見られる。

・ 滝壺は三方が高い絶壁で、西側の一面だけが狭くひらいて、そこから谷川が岩を噛みつつ流れ出てゐた。（二）

・ 深山の谷で奥の行止まりになつて居る処は無事であるが、嶺が開けて背面の方へ通じて居る澤は、夜中に必ず怪事がある。「二七」  
「魚服記」の滝壺は「三方」が高い「絶壁」で、西側の「一面」だけが「開いている」とされる。これは、『山の人生』では、「奥の行止まりになつて居る処」、「嶺が開けて背面の方へ通じて居る澤」となり、双方とも閉鎖された「魔所」が記述され、一箇所だけが「ひらい」て、または「開け」てに通じている。従って、学生の溺死した「魔所」は、『山の人生』・「二七」を踏まえたものだと思われる。

また、「魚服記」では、滝へ流れる川は「岩を噛みつつ流」れ、「大

蛇」が出現しそうな不吉な場所である。ここには、〈悲劇〉の予兆が感じられる。「とろろき」、「ぶるぶる」なども、〈不思議〉な失踪事件のメタファーである。

滝へ落ちた学生は「口」を小さく開け、水界の霊物の「蛇」を喚起させる。「ぐつと水底へ引きずりこまれた」という記述は、水底に「大蛇」が棲息しているようで、第四節の滝の中の「大蛇」に呼応している。

このような〈禁忌〉は、「魚服記」第二節にも見出せる。

三郎と八郎といふきこりの兄弟があつて、弟の八郎が或る日、谷川でやまべといふさかなを取つて家へ持つて来たが、兄の三郎がまだ山からかへらぬうちに、其のさかなをまづ一匹焼いてたべた。食つてみるとおいしかつた。二匹三匹とたべてもやめられないで、たうとうみんな食つてしまつた。さうするとのどが乾いて乾いてたまらなくなつた。井戸の水をすつかりのんで了つて、村はづれの川端へ走つて行つて、又水をのんだ。のんでるうちに、体中へぶつぶつと鱗が吹き出た。三郎があとからかけつけた時には、八郎はおそろしい大蛇になつて川を泳いでゐた。

この「三郎八郎」のきこりの兄弟の話は、『山の人生』・「四」の記述に近似している。

・ 十和田湖の湖水から南祖坊に逐はれて来て、秋田の八郎潟の主になつて居ると云ふ八郎をとこなども、大蛇になる前は國境の山の、マタギ村の住民であつた。

・ 八郎といふ類の人が山中に入り、奇魚を食つて身を蛇體に變じた

といふ話は、広く分布して居る所謂低級神話の類であるが、津輕秋田で彼をマタギであつたと伝へたのには、何か考ふべき理由があつたらうと思ふ。

ここでは、「八郎」という呼称、「魚」を食べて「蛇体」に変じたという記述が近似しているので、『山の人生』・「四」を踏まえたものだと思われる。東北地方にはこの種の伝説が広く分布し、「川魚をひとりで食うな」<sup>(12)</sup>もその一例である。「魚服記」第二節は、八郎は川で狩猟をして魚をぜんぶ食べ、おまけに井戸水を飲み干したので、その制裁として「大蛇」へ変身させられたのである。

食物の〈禁忌〉である「味噌」についても、「魚服記」第三節に、次のように記述されている。

日が暮れかけて来たのでひとりで夕飯を食つた。くろいめしに焼いた味噌をかてて食つた。

これに対応するのは、『山の人生』・「二五」である。

文政七八年の頃木を伐出す必要があつて、十月七日に山入して御幣餅を拵へたのはよいが、山の神に上げるのを忘れて、自分たちで皆食つてしまつた。さうすると早速山が荒れ出して、其夜は例の天狗倒しと謂つて、大木を伐り倒す音が盛んにした。此時も心付いて再び餅を拵へて詫びたので、漸く無事に済んだと謂つて居る。此地方では狗賓餅をするには、定まつた慣習があつた。先づ村中に沙汰をして老若男女山中に集まり、飯を普通よりはこはく炊ぎ、それを握つて串に刺し、よく焼いてから味噌を附ける。其初穂を五六本、木の葉に載せて清い處に供へて置き、それから

一同が心の儘に食ふのである。甚だうまい物だが此餅をこしらへると、天狗が集まつて来ると称して村内の家では一切焼かぬやうにして居た。

ここでは、「山の神に上げる」食物の「狗賓餅」について記述されているが、食物の〈禁忌〉は、前述の『山の神信仰の研究』の「山の神の禁忌」<sup>(13)</sup>に、次のように詳述されている。

食物についての禁忌をみると、先づ（略）味噌である。味噌が山の神の好ませ給う食物なので、人間はみだりに味噌を用いてはならなかつたのである。味噌は（略）美味で栄養があつて、火にあぶると特に芳しく食欲をそそる食品であつた。この有り難い味噌を創製した時は、現代人の想像を絶する貴重な、晴れの食物と考えられたのであらう。

「味噌」は〈山の神〉の好む食物なので、「みだりに味噌を用いてはならなかつた。」のである。スワは日常の食物として、焼いた「味噌」を食べ、〈禁忌〉を犯している。故に〈山の神〉が荒れ、「天狗倒し」や「あづきとき」の怪音、「山人」の「笑ひ声」がするのである。「味噌」は「晴れの食物」だったのである。

## 五、〈異界〉の生活

### 1、〈辺境〉の地

「魚服記」の冒頭は次のように叙述されている。

本州の北端の山脈は、ぼんじゅ山脈といふのである。せいぜい

三四百米ほどの丘陵が起伏してゐるのであるから、ふつうの地図には載つてゐない。むかし、このへん一帯はひろびろした海であつたさうで、義経が家来たちを連れて北へ北へと亡命して行つて、はるか蝦夷の土地へ渡らうとここを船でとほつたといふことである。そのとき、彼等の船が此の山脈へ衝突した。突きあたつた跡がいまでも残つてゐる。山脈のまんなかごろのこんもりした小山の中腹にそれがある。約一畝歩ぐらゐの赤土の崖がそれなのであつた。

小山は馬禿山と呼ばれてゐる。ふもとの村から崖を眺めるとはしつてゐる馬の姿に似てゐるからと言ふのであるが、事實は老いはれた人の横顔に似てゐた。

「魚服記」の背景は、「本州北端」であり、「ふつうの地図」にも「載つてゐない」い、「ほんじゆ山脈」に位置している。

ここで注目したいのは実際の「梵珠山」から「ほんじゆ山脈」への改変である。例えば、「ほんじゆ山脈」は、『角川日本地名大辞典』<sup>14</sup>等に掲載されている標高四六八メートルの「梵珠山」であると考えられる。しかし、「ふつうの地図には載つてゐない」とし、知名度の低い山で、この背景は、日常生活から閉鎖された〈異界〉であることを提示している。「ほんじゆ」と仮名表記されるのは「なだらか」で「小ささ」い山を、「むかし」という記述は、昔話のような〈非現実〉の空間を構築している。秀麗な「はしつてゐる馬の姿」は、それを打ち消すように「老いはれた人の横顔」とし、〈貧し〉い〈寒村〉を設定している。

〈辺境〉の地を造形するのに、「魚服記」第二節では、義経が家来たちを連れて北へ北へと亡命して行つて、はるか蝦夷の土地へ渡らうとここを船でとほつた。

とする。これは「山の人生」・「一一」に、

或は尼自身も特殊の心理から、自分が其様な古い嫗であることを信じ、まのあたり義経弁慶一行の北国通過を、見て居たやうにも感じて居た故に、其の言ふことが強い印象と為つたのでは無からうか。

とされ、「義経」という記述の一致が見られ、「義経弁慶一行」と「家来たちを連れて」や、「北国通過」と「北へ北へと亡命して行つて」は、ほぼ同じ意味を示している。従つて、「義経」の記述は「山の人生」・「一一」を踏まえてゐると思われる。「魚服記」には「北」という表現をリフレインし、「蝦夷」という地名を用い、「最果ての地」を一層強調しているのである。

「馬禿山」は、相馬正一氏の『「魚服記」試論——創作意図をめぐつて』<sup>15</sup>に詳細な指摘があり、実際には「馬禿山」という地名はなく、馬神山（五四九米）がそれに相当し、その形状から「馬影山」とも呼ばれたとしている。義経主従が馬を休ませた三厩がそのまま村名となつて現存しているが、「馬神山」の馬形も、義経の馬が霊となつて残されたものだといわれている。

では、どうして「馬神山」を「馬禿山」へ、しかも「老いはれた人の横顔」へと改変したのだろうか。それはスワと父親の〈貧し〉い空間を設定するためだと思われる。「馬禿山」は「表」よりも「裏」の

景色がいいとされ、〈貧しさ〉を強調している。

実際には、「藤ノ滝」は「馬禿山」の「裏」ではなく、「表」に位置し、遊山に訪れる人々も当然「表」の方だと言われている。それを「裏」としたのは、これから起こる〈神隠し〉によるスワの失踪事件を暗示するためだったのである。

## 2、孤立と貧困

「魚服記」第一節には、スワと父親の住空間が描かれている。

馬禿山はその山の景色がいいから、いつそう此の地方で名高いのである。麓の村は戸数もわづか二十でほんの寒村であるが、その村はづれを流れてゐる川を二里ばかりさかのぼると馬禿山の裏へ出て、そこには十丈ちかくの滝がしろく落ちてゐる。(略)

滝の下には、さ、やかな茶店さへ立つのである。

スワは「馬禿山」の麓の「二三十」戸しかない「寒村」に住居を構えている。「村はづれ」の川を「二里」(約八km)もさかのぼると「馬禿山」の「裏」へ出る。そこには十丈(約三十m)ちかくの滝が落ちているが、その滝の下ですぐ傍が、スワの「茶店」である。「茶店」は「滝壺のわき」にある。「茶店」の傍の「滝壺」は、三方が「絶壁」になっていて、父親はそこから「紅い蔦の葉」を「掻きわけ」て出現する。「茶店」から「炭小屋」までは「三町程の山道」(約三〇〇m)で、そこは「熊笹」を踏み分けて歩く。かなり〈危険〉な空間といえる。

馬禿山には炭焼小屋が十いくつある。滝の傍にもひとつあった。

此の小屋は他の小屋と余程はなれて建てられてゐた。小屋の人がちがふ土地のものであつたからである。(二)

「炭焼小屋」は「十いくつ」しかなく、しかも、「他の小屋」と「よほど離」れ、「ちがふ土地」のものとされるので、スワと父親は〈隔絶〉され、〈閉鎖〉された空間に住んでいる。

夏近くなると父親は滝壺の傍に「丸太」と「よしず」で「茶店」を作る。屋根は「檜の大木」、布団は「むしろ」で、これは、『山の人生』・「二」の「冬の雨雪」の時、「川の岸にあるカハヤナギの類の、髯根の極めて多い樹木を抜いて来て、其根をよく水で洗ひ、それを布団の代りにした」を踏まえている。スワは「雨」の日には、茶店の隅で「むしろ」をかぶり「昼寝」をする。この「むしろ」は、スワが父親に犯される事件の伏線であると思われる。

「魚服記」第二節には、スワと父親の「茶店」と「炭焼小屋」の移動生活が描かれている。

夏近くなつて山に遊びに来る人がぼつぼつ見え初めるじぶんになると、父親は毎朝その品物を手籠へ入れて茶店迄はこんだ。(略) 父親はすぐ炭小屋へ帰つてゆくが、スワは一人ゐのこつて店番するのだつた。(略)

黄昏時になると父親は炭小屋から、からだ中を真黒にしてスワを迎へに来た。(略)

父親はなんでもなささうに眩きながら滝を見上げるのだ。それから二人して店の品物をまた手籠へしまひ込んで、炭小屋へひきあげる。

そんな日課が霜のおりるところまでつくのである。

夏近くなると、父親は毎朝「ラムネと塩せんべいと水無飴」を手籠へ入れて「茶店」まで運び、すぐ「炭小屋」へ帰るという「日課」が「霜のおりるところまで」続く。が、この移動生活は、『山の人生』・「二」に、次のように叙述されている。

我々平地の住民との一番大きな相違は、穀物果樹家畜を当てにして居らぬ点、次には定まつた場所に家の無いと云ふ点であるかと思ふ。（略）

冬になると暖かい海辺の砂浜などに出て来るのから察すると、彼等の夏の住居は山の中らしい。

ここでは、「夏」の記述の一致、「霜のおりるところ」と「冬」の近似、「茶店」から「炭小屋」への移動と、「定まつた場所に家の無い」という類似が見られ、双方とも「農耕民」と区別された山の「移動生活」を表現している。従って、スワと父親の「移動生活」は、『山の人生』・「二」の記述を踏まえていると考えられる。

「炭焼」をしている父親は、「ぼん」が過ぎると炭を背負つてふもとの村へ売りに行くが、「寒村」なので売り上げはわずかである。「魚服記」第二節では、「父親のこしらえる炭は一俵で五六銭にしか売りあげられず」としているが、これは、『山の人生』・巻頭の「何としても炭は売れず、何度里へ降りても、いつも一合の米も手に入らなかつた。」を踏まえていると思われる。前掲の木村氏は、『太宰治のレクチュール』<sup>(17)</sup>で指摘しているように、炭一俵売っても約一合の白米しか買えない。スワの「茶店」でも「一日五十銭」にもならず、白米一升

に相当し、両方を合わせても、二人の食い扶持にはほど遠い額だったといえる。

またスワの食物は、『山の人生』・「二五」の「飯を普通よりはこはく炊ぎ」を、「くろいめしに焼いた味噌をかてて食つた」に改変し、「くろい」めしを付け加えて、親子の〈貧しさ〉を強調している。

このように、「魚服記」は、村落共同体からの秩序の外部に追いやられたような孤立した場所であり、苛酷な自然にさらされてしまった人々の〈悲劇〉を描いた作品だといえる。

## 六、結び

「魚服記」は山内氏が指摘した以外にも、『山の人生』から広く、深く材を得ている。例えば、「魚服記」第二節のスワの造形は、「裸体」や「赤」い髪は『山の人生』・「五」、「二二」、「大声」は『山の人生』・「二二」を踏まえている。しかし、『山の人生』との相違は、「スワ」という呼称が付与され、『山の人生』・「二二」の「踵」までくる髪を「短」かくし、「大声」も『山の人生』・「二二」のような「奇声」ではなく、「美しい」としていることである。つまり、「鬼子」の凶暴性を排除し、〈無邪気〉で〈従順〉な少女としている。

また、『山の人生』・「二四」の〈神隠し〉譚は、「魚服記」の主要なテーマである女性の失踪事件に深く関与し、特に、「魚服記」第二・三節の〈危険〉な時間や〈風吹〉等の〈怪異〉現象、スワの「をんな」への変化に用いている。また、『山の人生』・「六」も、失踪



前の「花嫁姿」や〈水の神〉に嫁ぐという構想に用いている。さらに、「魚服記」第三節の「天狗倒し」、「あづきとき」、「山人の笑い」は、「山の人生」・「二七」、「二八」の「天狗笑ひ」「天狗倒し」「笑ひ聲」を踏まえている。

山の〈禁忌〉については、「魚服記」第二節の「学生の死」は、「山の人生」・「二八」の「物忌み」を、同じく第二節の「三郎と八郎」のきこりの兄弟の話は「山の人生」・「四」の「八郎」の話を踏まえ、「魚服記」第二節のスワの初潮は、「山の人生」・「一九」の「血の穢れ」を、食物の味噌も「山の人生」・「二五」の「狗賓餅」の記述を踏まえている。これらの〈禁忌〉を犯すと、山が「荒」れて、死んだり、失踪事件が起こったりするのである。

その他、「魚服記」第二節の父親とスワの移動生活は、「山の人生」・「二」を、食生活は「山の人生」・「二五」を踏まえ、親子の〈貧しさ〉を強調している。

このように、「魚服記」は『山の人生』の種々の叙述を踏まえ、〈閉塞〉された〈山間〉に住む少女の〈悲劇〉、運命の苛酷さを描いている。

スワは、山に住む〈異類<sup>(18)</sup>〉の女性であるが、〈純粹無垢〉な少女ゆえに、同族の父親に凌辱され「死」を迎えてしまう。『思ひ出』のみよや「列車」のテツさんのように、〈傷〉付けられても無抵抗な〈哀切〉な少女なのである。

## 〔注〕

- (1) 拙稿「佛敎大学大学院紀要」(第二十九号 一九九九〔平11〕年三月)
- (2) 『日本国語大辞典』(第二版 第八卷 二〇〇一〔平13〕年八月、小学館)「たけなが」とは、和紙の一種。奉書紙の類で、彩色した紙を長い短冊形にした女性の髪飾り。
- (3) 民俗学研究所編『民俗学辞典』(一九五〇〔昭26〕年一月、東京堂)
- (4) 柳田國男『定本柳田國男集』(第四卷 一九三八〔昭13〕年、筑摩書房)「妖怪談義」の内の「かはたれ時」参照。
- (5) 柳田國男「山人外伝資料」(郷土研究一ノ一二)・「天狗の話」(『妖怪談義』一九〇九〔明42〕年三月)
- (6) 右に同じ
- (7) 「妖怪名彙」(『妖怪談義』一九三八〔昭13〕年六月、〔昭14〕年三月、民間伝承三卷)
- (8) 『民俗学辞典』(同前(3))によると、「成年式にあたって、特別の結髪をする風が古くは一般におこなわれ、これによつて未成年との区別をあらわしていた。今は共に廃れたが男子では元服、女子では髪上げの盛事があつた。晴の日などは島田髪にして娘になつたしとした。」と記述されている。
- (9) 拙稿「魚服記」の素材―「甲賀三郎」をめぐる―(『佛敎大学大学院紀要』第二十九号、一九九九〔平11〕年三月)
- (10) 一九三三〔昭8〕年三月一日付
- (11) 堀田吉雄『山の神信仰の研究』(一九六六〔昭41〕年三月、伊勢民俗学会)
- (12) 土橋実 広中勝美 佐藤文夫「川魚をひとりで食うな」(『民間伝承集成』語り部の記録 下北半島昔話集 一九八四年七月、岩崎美術社)
- (13) 堀田吉雄『山の神信仰の研究』(一九六六〔昭41〕年三月、伊勢民俗学

会）によると、女性の産火や通経時の忌みをいい、いかなる神様でも禁忌される代表的なものである。

- (14) 『角川日本地名大辞典』（2 青森県 一九七八〔昭53〕年一〇月、角川書店）

- (15) 『太宰治の世界』（一九七七〔昭52〕年五月、冬樹社）

- (16) 津軽に訪れ、ガイドの方から取材し、「藤ノ滝」は「馬神山」の「裏」ではなく、「表」に位置し、遊山は「表」の方だと伺った。

- (17) 花田俊典『太宰治のレクチュール』（二〇〇一〔平13〕年三月、双文社出版）

- (18) 拙稿「太宰治の女性像——『晩年』を中心として——」（『佛教大学大学院紀要』第二十八号）二〇〇〇〔平12〕年三月）

（あおき きょうこ） 文学研究科国文学専攻博士後期課程（

指導：三谷 憲正 教授）

二〇〇三年十月十五日受理